

誌を細觀する場合の如きは必ず先づ獨逸とか佛蘭西とかの行政的單元を採るべきであると思ふ而して更に其の内部に立ち入つて研究する様な場合には其の行政的區劃の内に在つて自然的な單元をとつて進むべきである、恰も本邦の地誌を研究するに當つて邦國內を幾多大小の地理區に別けて觀察推究して行くと同様である。

扱て其の單元の大小は學習者の程度に應じて決定すべき問題で、程度の高まるに従つて次第に大單元は細分して小單元に、單元は更に副單元にと深く進むべきであらう（地理教育大正十

獨逸の地理學界

是迄英吉利を初め、佛蘭西並に北米合衆國の地理學界を、簡單ながら考究しましたから、今度は獨逸に於ける狀況を視察致して見ようと思ひます。然し、獨逸は近世新地理學の發祥地でありますだけに、地理界は却々にぎやかで、觀

五年八月號田中教授の論文參照)

又地形主義と氣候主義とは一般から云へば何れにも偏すべきではなく尙ほ植物帶・人口密度・生産地帶・交通運輸地帶・商業圈・聚落分布區等をも採つて之れ等を凡て綜合し以て綜合地理的單元(地理區、地理的單元)として研究すべきであらう、要は地理は場所によつて統一されたる綜合帶を認識せんとする學問であるから、部分に偏し斷片孤立して全姿(地理的景觀 *Landschaft*)を見るの能を失ふに到つては全くの本末轉倒である。(三、一〇、二)

寺田貞次

察すべき點も從て少くありませぬ、少くとも、地理學研究室の狀況、獨逸に於ける地理學者の狀況、地理學生の狀況並に地學關係機關等の各項目に付きまして、調査しなければなりません。短日月の滯留では到底完全を期し得ない仕事で

ありますが、唯自分が滞在中、幸に視察し得た材料のみに付きまして、地理學界一部の考究なりとも御紹介申して置けば、斯學發達に對する或は一助ともなりはせぬかと思つたので、尙引きつゞき此稿を草した次第であります。先づ最初に獨逸國內各大學の地理研究室を考究致し、好機あらば他の項目にも及び度い考であります。

獨逸では終始伯林に滞在餘暇國內各大學を視察した、就中ライプチヒ大學は、冬期に暫く滞留聽講序に附近のハルレ大學を訪ひ。巴里の途、ライン沿岸のケルン・ボーン各大學を。伊太利漫遊の歸途、ハイデルベルヒ・フランクフルトアムメイン乃至はゲツチンゲン各大學。ウイン旅行の途、ミュンヘン大學を最後の一日をハンブルク大學訪問に費した。順を追て視察の大様を紹介する。

一、ライプチヒ大學地理學教室

ライプチヒには當時北海道大學の朴澤進博士が居られ氏の厚意で、俗に日本人宿と稱せられ

て、從來邦人の止宿した事の非常に多いアルムハウスと云ふ家に厄介になつた、近くは黒田源次氏、前には友枝、野上兩博士も居られたと聞く主人は懇切と云ふので知られて居るが、家屋はライプチヒ市でも古い建物の一つで、陰鬱であり、厠に電燈もなく、不便なことスコットランドのエデンバラ下宿以上である、其上家人も世評程の人物でもないで、氣持の悪いこと限がない、然し教室へは極く近いので暫く我慢する。

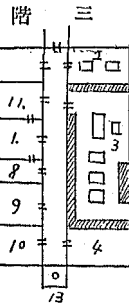
地理の研究室は、ライプチヒ大學本館正門（西門）の左側（北手）の建物で、二階と三階とが之に充てられて居る。二階は經濟地理教室で、三階は一般地理の研究室である、兩教室は螺旋式梯子にて連絡、入口は三階になつて居る。戸を排して入ると、廊下を中央に、大小教室が其兩側に並んで居る、廊下の兩側には、標本的風景寫真並に故教授の肖像がかけられてある。主任教授室前の壁にはラツツエル教授の肖像も拜することが出来た。室は大小九室に別れ、右側は主任教授フォルツ氏室を初め、アルバイト室・地圖

室であり。左側は、助手室を初め圖書室、教授室になつて居り。階下は、一帯經濟地理の研究室で、大小四室に區劃、教室及標本室の他、經濟地理の圖書室並に歴史地理圖書室になつて居る。現今の主任は、フオルツ教授 Wilhelm Vols である、教授はハルレ Hae の人（一八七〇年八月十一日生）ライプチヒ・伯林並にブレスラウ各

ライプチヒ大學

地理學インスチテュート

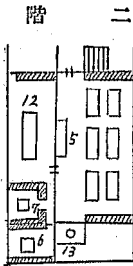
第三



一

經濟地理研究室

圖



- | | |
|-------------|------------|
| 1. 主任教授室 | 2. 助手兼事務室 |
| 3. 圖書室 | 4. 教授室 |
| 5. 演習室 | 6. 經濟地理圖書室 |
| 7. 歴史地理圖書室 | 8. 助手室 |
| 9. アルバイト室 | 10. 地圖室 |
| 11. フオルツ教授室 | 12. 標本室 |
| 13. 階段 | |

大學に學び、ラッツェル・リヒトホー・ヘン並に

Patsch に付て地質學、地學並に人類學を研め、ブレスラウ大學教授よりライプチヒ大學教授に進み、ラッツェルの後繼 Joseph Patsch の後をつがれたのである。（一九二二年）。でつくりと肥つた品のよい風姿、氣候と人生と云ふ題下に講じて居られ、主任室（一）には、ラッツェルの石膏胸像が安置されて居る、ラッツェル教授の居た研究室は、既に廢して居るけれども、此大學がラッツェル教授の最後迄居た處で、人文地理の大業が此處に成されたかと思ふと、例へ室其のものは當時のものでないとは云へ、轉感慨の情に堪えなかつた。フオルツ教授に付て、ラッツェル教授の後を尋ねる、御遺族は今ミュンヘンに居られ、夫人と令嬢が尙御健在の由御話であつた。

助手には Rolig と云ふ人が居た、入口の直ぐ左手の室（二）に控え、教室に關する事務に従事して居る。圖書室（三）は相當廣い室を利用し、周壁に書棚を設備して居る點は、何處の圖書室も同様である。但しラッツェル教授の居た處だ

第二圖 (フーリド教授筆跡)

Prof. Dr. Ernst Friedrich

*Universität
Leipzig*

9.15.1.26.

から、同教授に關する書物とか、將遺著でも多數に觀られるかと囑望したに反し、何等發見する事が出来なかつたのは、聊もの足りぬ氣がした。教授室(4)は一般教授の休憩室で、フーリド博士教授の控室をなして居る。同教授は(Ernst Friedrich)既に六十以上と思はるゝ老齡で中風症の氣にや歩行困難の様子フオルツ教授を助けて經濟地理の一部を担当して居る。教授の得意とする産業地理並に各論では南米の經濟地理を講じて居た。同教授の講義は、何れも夕頃で、幻燈を使用して講せられる、

獨逸の地理學界

老齡であるのと、講題が地味であるため、講義としては甚だ振はない、直接聽講するよりも、其の著經濟地理通論や、アンドレー經濟地理中におさめられて居る氏の著生産地理などを、讀んで居る方がよつぽど有難味がある。然かし、却々懇切な方で、生産地理に關し御尋ねすると、自分は既に老年であるから、差したる仕事も出来なけれども、將來は産業地理を公にする考へて、目下研究中であると云ふて居られ。又ラッツェル教授に付ては、自分は同教授の助手として仕へたものだとして喜んで話され、遺族の住所など丁寧に教示され、一度手紙を出して見よとすゝめて下した。

當大學の地理學部は、主任のフオルツ教授がライプチヒ高等商業の地理科を兼ねて居られるので、經濟地理は一入と盛で、其の研究室は階下全體を之に充て、演習室や圖書室を備えて居る、演習室(5)は周壁に雜誌並に小出刊物を蒐集し演習室兼研究室となしフオルツ教授の經濟地理演習が此處で研究されて居た。標本室は目

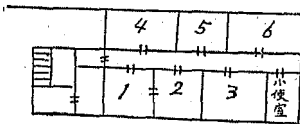
下の處未だ名稱のみで、餘り完備したものではないが、經濟地理の圖書室(6)は、小さいながらも、よく撰擇して蒐集されて居り、學生の研究には好適である。經濟地理の圖書室と共に、歴史地理の圖書室(7)と云ふのがある。同様小室ではあるけれども、以前此の方面の大家キールト等が居たので、其の蒐集は完全で自分等には讀めない希臘語ラテン語の參考書が數多く集つて居る。歴史地理の研究には、貴重なる研究室であるが、惜しいかな、此の方面の研究は、どちらかと云ふと下火になつて居る關係上、利用される機が少くなつて居る點は遺憾である。

此の新設の地理研究室の他に、植民地理研究室並に郷土地理研究室と云ふのが別になつて居る。植民地理の方は、大學本館の北に並べる古い聖堂のすぐ北に位し、階上の一部が之に充てられて居り、數室備つて居る。研究室は、中央の廊下を以て左右兩側に教室を有し、廊下兩壁には、海口全圖とて支那天津附近の手記圖を初め、各種寫眞並に土俗品などが陳列されて居る。主

任は、植民地理の大家殊に阿弗利加の研究を以て知られ、阿弗利加に關する大著がある、ハンス・マイヤー教授(Hans Meyer)である。入口の直ぐ右側は教授の室(左圖(1))、教授は、丈の高い方で、直覺的に故久原理學博士を彷彿せしめる、大學では矢張り、阿弗利加を講じて居られたが、自分はなく聴講するの機を得ず遺憾であつた。教授の室は、中央に机を周壁に書棚並に阿弗利加、ジャバ等の風景寫眞が多數陳列されて居る。

(2)は助手室、Dv. Kar Heinrich Dietzel 並に Dv. Herma Wissma 氏が居た。書棚を以て二部に

第三圖
植民地理研究室



區劃し、地圖並に地理用器具機械を保存し、植民地の產物などをも幾分蒐集し、又幻燈用フィルムの整理をやつて居た、但し、日本の部は遺憾ながら僅に鎌倉大佛・水田・茶園・日光門景位に過ぎなかつた。

(3)は新聞雜誌室で掛圖をも藏して居る、雜

誌は各國の地學雜誌を網羅して居る、然し日本のは見當らなかつた。

(4)は地圖室で、製圖臺を中央に、周に地圖保存函を備え、机も二脚許用意されて居る。

(5)は標本室で、中央に大卓子を、周壁に標本箱を置き、マイヤー教授の阿弗利加採集の地質・植物標本並に寫真類を保管し、又南米の蒐集品も少くなかつた。

(6)は圖書室で、中央に大卓子二個を、壁には書棚ををく、植民地關係圖書を集め、阿弗利加を初め、舊獨領地方の圖書は最多く、植民地ではないけれども日本に關する書物も意外に集つて居る。

要するに、此研究室は單に植民地理だけの研究室としては、設備と云ひ其規模と云ひ、他に類例なきを覺えた。

郷土地理研究室は、大學本館西門の南側、古雅な一建物中にある。壁に鏤めてある銅板に依ると、此の建物は、一七三六年の建設で、一階には嘗て Gottscheds の居住せし處で、夫のゲー

テの學生時代訪問したことがある處であると、舊ラートハウス傍なるゲーテの遺跡並に學生帽をいたゞける凜々しいゲーテの銅像、さてはゲーテの著ファウストを物語るケラーと共に、モルフホロギーの創思者として、地學に關係あるゲーテを追懷せしめた。研究室は、最階上の屋根裏で、極く狭小な且陰鬱な三室から成り、Kotzschke 氏之を擔當し、郷土地理及郷土史、移動史に關する著書、小出版物を初め、石器土器等の發掘品に至る迄蒐集され、小室であり陰氣であるにも係はらず、反て新築の地理研究室に迄發達する道程を示めす遺物としてゆかしき感到うたれた。

序に、教室は各研究室には附屬して居ない、演習以外の講義は皆本館内の教室を使用するのである。フォルツ教授の講義は、幻燈や地圖掛、圖表掛の特殊設備を有する大講堂階段式教室を使用し。フリードリツヒ教授は又他の室を使用して居た。フリードリツヒ教授の使用して居た教室は(Hoolsaal十一號) Dr. Hermann Credner 製の太

エビチアスコフを備へ、地圖を極く鮮明に大きくうつすことが出来、フリードリツヒ教授の講義の様な細かい地名を必要とする話には好適である。ハンスマイヤー教授は、何等装置のない普通教室を使用して居た、何れにせよ地理の様な地圖や圖表や、標本の使用を要する講義には、研究室から餘り隔り過ぎて居る事は不便である。

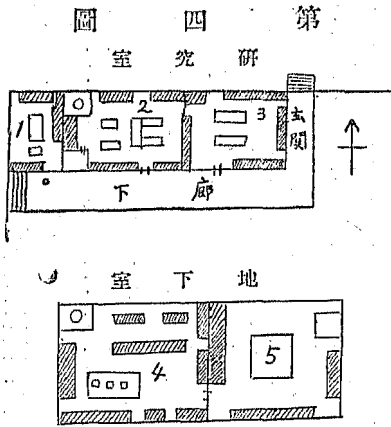
要するに、ライプチヒ大學は、十五世紀頃ブラーグ大學から移つて來た學生で、基礎の出來た大學で獨國では古い大學であり、早く學術の中心となつた大學であると云ふ事以上に、夫の人文地理學の大家たる O. Peschel (1875) を初め、F. von Richthofen (1883 - 1886), Friedrich Ratzel (1886 - 1904) などの居た處であるから、多大の嚆望を以て暫く滞在したわけでありますが、不幸にして各教授の遺跡は既に見られず、唯ラツツエル教授の友人として地學に活動したハンスマイヤー教授並に同教授の助手から進んだフリードリツヒ教授に會し得たのは、何よりの愉快とする處。研究室は、新しくなり、當時の面影

は之をどぎめなにいせよ、マイヤー教授の研究室や、郷土地理研究室の昔ながらに保存せられて居るのを觀、ラツツエル教授などの當時を追懷するに足つたのは、余の満足する處でありました。

二、ハルレ大學

ライプチヒ滞在中、一日ハルレを訪ふ。地理教室は、大學本館の前に建てられた別館 Melanchthonianum 中に在る。階上は史學科教室で、階下及地下數室が地理に充てられて居る。丁度主任の O. Schiller 教授が居られ、懇切なる案内を受ける事が出來た。教授は五十過と思はるゝでつぶり太つた方で、我が國の山崎直方博士並に石橋五郎博士とは御友人の由、談られて居た。當教室には人文地理學者として知られたキルヒホーフ教授 (Alfred Kirchhoff) が居た處であるから、御尋ねすると、其所に在つた同教授の肖像寫眞を見せて下した、面あたり教授の溫顔に接し感慨。教授は、一八七三年から一九〇四年迄當教室の主任であつたが、既に歿後廿年を経過して

居る、ライプチヒに老を養い彼地に歿せられし由、終生獨身を守られて居たので御遺族もない。例に依り墳墓を展じたいと思ふたが、不幸發見するを得なかつた。教授の居られた當時の研究室は、今の本館の最樓上の一室であつたと、本館を指して當時を追懷せられた。序ながら申しますが、キルヒホーフ教授の後にはEd. Brückner (1904)を経て、一九一一年迄はボン大學に居られる Alfred Philippson 教授が居られ、シュルッター教授はキルヒホーフ教授の高弟として、



獨逸の地理學界

フライリプソン教授の後をつぎ、當主任となられ今に至つたものである。シュルッター教授

の案内で、教室内を縦覽する。教室の圖は大略右の如きもので、各室に付て大様を述べることにする。

(1)は主任教授室、小室なれど明るく、入口の正面に机を、其前に大机子を控え、各種地圖や書籍類を置き、周壁に書棚を、別に岩石標本箱も備えられて居る、教授はハルレ地學會を率ゐ、雜誌

Mitteilungen des Sächsisch-Thüringischen Vereins für Erdkunde zu Halle.

を經營して居られるので、之に關する書類も少なくなかつた。

(2)は圖書室で稍廣き室、一側に黒板をかけ教壇を備え、室の中央には卓子並に掛圖箱を置き、周壁は書棚を以て充たす、研究室を兼ね演習室になつて居るのである。

(3)は地圖室、室の中央に大卓子貳脚を並べ、周壁には地圖箱を備え、教授用掛圖から各種地圖を蒐集地球儀類をも備えてあつた。

以上の各室は、螺旋狀階段にて階下の地下室

と連絡して居る、地下室は二室に別れ、何れも階上の室よりも廣い。

(4)は標本室で、周壁の硝子戸棚には地學用器械類を初め、故キルヒホーフ教授の蒐集にかゝる阿弗利加・亞米利加邊の土俗品並に產物類を陳列し、室の中央には大卓子をおき、氷河地形、都市其他の模型を陳列して居る、此の室には古地理書の蒐集多く、室の一隅なる數個の書棚に充滿され目下整理中と聞いた。

(5)は製圖室で、室の中央に大きな製圖臺一臺をおき、周壁には書棚、地圖に關する書物を蒐集、事務員一名しきりに製圖中であつた。

教室は、二階の普通教室を利用するもので、其五十三號はシュルツター教授の講義室であつたから、特にのぞいて觀る、幻燈の裝置がある

だけで特種な設備はない様であつた。

要するに、此教室は故キルヒホーフ氏の教授時代の小規模からは迄擴大されたもので、古い歴史を有して居る大學ではあるが、今では獨逸國の大學としては割合に小さい大學であるにも係はらず、地學のみに是だけの設備をして居る點は、如何に地學に重きを置いて居るかを察せられて愉快であつた。隣の學生集會所で食事をすませ、本館の傍なる考古博物館 *Archologische Museum* を縦覽、ドーム *Dome Kirche* (1523) の傍にある礦物學インスチテュート並にドームの北に在るシュロスなどを觀、今日エキスカリヨンに出かけたライプチヒ大學地學部の助手に出合ひ同道歸宿した。

濟州島火山岩中の斑晶及び第三紀化石

原 口 九 萬

濟州火山島に就ては嘗て中村教授が本誌火山

號(大正十四年十月第四卷第四號)上に於て其興